

---

aiolos

エンノイア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

aiolos

### 【Nコード】

N9070V

### 【作者名】

エンノイア

### 【あらすじ】

離婚した母親と暮らす、ごく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、未知の国、アイオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出会い、数奇な運命に巻き

込まれていく…。

## 第一話 選ばれし少年

> i 2 9 7 1 6 — 3 7 8 1 <

「王よ、どうされました？」

側近だろうか。ゆつたりとしたローブをまとった青年が尋ねる。

腰まで伸ばした髪は水色、先のほうで緩く束ねられている。

「この国に闇が迫っている……。新しい王を見つけなくては」

ベールをかぶった女性が、水晶に手をかざす。ここからではよく見えないが、何かが映し出されたい。かぶったベールから、先ほどの青年と同じように、水色の髪がのぞいている。

「アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国の新しき王となるべき人間を！」

不思議な夢を見た。どこかの国の王様が、新しい王を探すのだ。

ピピピ……。ピピピ……。

うるさいな……。

耳元で目覚まし時計がけたたましく音をたてている。

ピピピ……。ピピピ……。

わかったよ。起きるよ……。

僕は、しきりに落ちようとしてくる上まぶたと闘いながら、目覚まし時計に手をのばした。

「……？」

下りない。  
というか、すでに下りている。

多くの目覚まし時計がそうのように、僕の目覚まし時計はセットするときはレバーを上へ上げ、止めるときは下げる、という仕様になっている。

だが、レバーはすでに下りている。なのに目覚まし時計は鳴り続けている……。

「わぶっ!!」

突然、顔に変なものが当たった。モサツとかワサツとかいう感触。黄色い羽根が舞い散る。

羽根……？

「ピピッ！」

ここでようやく目が覚めた。音をたてていたのは目覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。

昨日、目覚まし時計をかけ忘れたんだな。

僕の目の前にいたのは、トサカのように羽がピンと立った、黄色い鳥だった。僕の顔に突進してきたソイツは、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。

種類は何だろう。インコのようにも見えるが、大きさは僕の顔ほどもある。よく知らないけど、オウムとかの類いかもしれない。だいたいなんで僕の部屋に鳥が……？

「エンノイアー？ 起きてるんだったら下りてきなさい」

「あ、はい！」

ちょっと迷ったが、その鳥を肩にのせると、僕は一階へと下りた。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。階段を下りてきた僕に気づくと、振り返って言った。

「あら、そのコ、気に入った？」

「えっ！？ 気に入った、ってことはまさか……」

まさか、母さんが僕に？

すると、母さんは満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたにとって。」

……僕は心底がっかりした。

だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね　　今度会ったらお礼言つのよ」

ハア……。

とりあえず、自己紹介をしようと思う。

僕はエンノイア・グノーヴァー！。13歳。半年前に私立の中学に入学したばかり。両親は離婚していて、今は母さんと二人暮らし。

父親については……あんまり話したくないな。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合って三年ほどになる。母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……。僕はロバートのことがあまり好きじゃない。

「ところでエンノイア」

「うん？」

今日の朝食はパンとコーンフレーク。バターを塗ったパンにかぶ

りつきながら、母さんの言葉を待つ。

「今日は早く帰って来てね。大事な話があるから……」  
妙に意味深な表情で言う。

「う、うん……」

何だろう？

「へえ、いいなあ！」

「うん。デュークって名前にしたんだ」

ここは中学校の教室。

今話しているのは、スティーブといって、クラスで一番仲のいい友達だ。

そうそう。あの鳥、飼うことにしたんだ。名前はデューク。

「それにしても、ロバートからもらったっていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこ見せたいだけなんだ」

すると、スティーブが聞いた。

「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ？ 俺、この前、お前んちに行った時会ったけど、いい人そうだったじゃん」

「どこってわけじゃないけど……」

自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「はーん。ヤキモチだな」

「ヤキモチ？ どういうこと？」

「お前はそのロバート、に母ちゃんを取られるのが怖いんだろ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ」

「ば……！ 違うよ！！ そんな、子供じゃあるまいし」

「ほら、席に着けー。授業始めるぞ」

カチカチカチカチ……。

時計が9時10分を指している。呆然と時計を眺めながら、考える。

ヤキモチなんかじゃないけどさ……。

なんていうか、ロバートには男らしさが無いんだよ。いつもへらへら笑ってるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか……。

「……ノイア」

「？」

誰かに名前を呼ばれたような気がした。

あたりを見回してみたけど、先生は相変わらず教科書を読んでいるし、他の生徒が呼んだ気配もない。気のせいか……。

「……エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。ふと、窓のほうを見ると……。

「デューク！！」



なんと、教卓の横にある窓の外に、デュークがとまっていた。  
窓ガラスをくちばしでたたき、侵入を試みている。  
なんか、いやな予感……。

パリン！！

デュークはくちばしで窓ガラスを割ると、またまた嬉しそうに、  
僕のほうに飛んできた。

「デューク！ どうしてここに？」

デュークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。

「エンノイアくん……。それは君のペットかね？」

見上げると……。最悪なことに、デュークは先生の頭の上に大変な  
落とし物をしていた。

「あーあ！ しぼられた、しぼられた」

あの後、僕は2時間みっちりお説教を食らった。（僕が連れてき  
たわけじゃないんだけど）

デュークは何食わぬ顔で飛び回ってるし。

そうだ。今日は早く帰れって言われてたんだっけ。すっかり遅く  
なっちゃったな。

僕は家の玄関のドアを開けた。すると……。

（ロバート……！？）

居間でロバートと母さんが話している。普段は化粧もしない母さんが、今は髪をたらして、妙にめかしこんでいる。

「なんだ。ロバートが来てたのか」

何だか無性に腹が立ってきた、僕はそのまま居間を素通りして、二階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、

「エンノイアー？ 帰ってるんだったら、こっちへ来なさい！」

母さんに呼びとめられてしまったので、僕は仕方なく居間へ向かうことにした。

「やあ、エンノイアくん、久しぶりだね。おや？ その鳥は。よかった、気に入ってくれたんだね！」

僕は、デュークを肩に乗せたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。

「別に。こんなもの、もらっただって、迷惑だよ」

「エンノイアー！！」

母さんがヒステリックに怒鳴りつける。

「あはは。それもそうだね。悪かったね」

これだ。ロバートのこういうところが腹立つんだ。たまには怒ってみればいいのに。

「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」

「で？ なんなのさ。大事な話って」

イライラしてきたので、母さんの言葉をさえぎって聞いた。

「あ、それがね。私たち……結婚しようと思うの」

「え……？」

「結婚……って……、どうして……？」

最後の方はほとんど声にならなかった。

「どうしてって。あんだだって私たちが付き合ってること知ってるでしょ。」

「そういうこと言ってるんじゃないよ！」

ロバートと母さんが、面食らった表情でこっちを見ている。

「どうしてこんなやつと結婚するんだよ！ 母さんはいつもそうだし、ちょっと優しくされたらすぐその気になって。こいつだって、結婚したら父さんみたいに豹変するに決まってる。こいつが新しい父親だなんて、僕は認めないからね！」

無我夢中でそう言い終わったとき……。

ピシャッ。

頬に鈍い痛みが走る。

母さんが僕の頬を叩いたのだ。

「レナ！」

ロバートが慌てて母さんを制止する。

「あんたはどうしてそうわからず屋なの……！ そりゃ、いきなり『この人が新しい父親です』なんて言っても、無理だと思う。けど、あんたは一度でもこの男性の<sup>ひと</sup>ことを理解しようとしたことがあるの！？ ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張ってるのに……」

「よさないか、レナ！」

ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。

「ともかく、座ってゆっくり話そう。ほら、エンノイアくんもこっちおいで」

「……いだ」

「え？」

「母さんなんて大っつ嫌いだー！ー！！」

ボタンッ！

「あ！ エンノイア！！」

僕は、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。

……どうしてあいつなんだよ。

母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのは僕なのに。

街の人が驚いて、駆けている僕の方を見る。  
でも、気にもとめず走り続ける。

やっぱりヤキモチなのかもしれない。でも、怖いんだ。母さんが僕よりロバートの方に行っちゃうのが。

お願いだから、僕を一人にしないでよ。

涙がこぼれてきた。それをごまかすように、僕はひたすら走り続けた。

……十分ほど走っただろうか。ふと気づくと、僕は川原に立っていた。

川原の周りに立った木々の葉が、寒そうに揺れている。まだ、春というには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。

……コートを着てくれば良かったな。

少し冷静になって、あらためて考える。

これからどうしよう……。

今すぐ家に帰るわけにはいかないし……。

いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配させてやるう。  
そう思ったとき……。

「…エンノイア」

いつかも聞いた声が、僕の名前を呼んだ。

そうだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰！？　どこから話してるの！？」

僕は宙に向かって聞いた。

あたりには誰もいない。近くの木の子に、デュークがとまっ  
るだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。

「我が名はアイオロス。……お前はあの男から母親を取り戻したい  
のだろう？」

「……！」

「取り戻す」という言葉に、僕の心は動揺した。

それに、なぜ声の主はそんなことを知っているんだ？

「と、取り戻したいなんて……。僕は別に……」

「隠さずともよい。私にはお前のことがわかってるのだ。」

僕のことかわかっている？

一体誰だというのだろう。

すると、声の主がとんでもないことを言い出した。

「その願い、かなえてやろう。」

「ほんとに!？」

「ただし、条件がある。アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほしい。そうすれば、願いをかなえてやろう」

アイオリア？ まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。

「アイオリアって……そんな国どこに……」

そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさに、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れる音も消えていく……。

そのうちに、僕の意識は遠のいていった……。

つづく



## 第一話 選ばれし少年（後書き）

はじめて投稿します。

よかったら感想等、聞かせてください



## 第二話 森の狩人

> i 2 9 7 1 7 — 3 7 8 1 <

サワサワサワ……。

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。

先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。

そつと目を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かった。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。

「森!？」

とつさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。

「川原にいたのに……どうして森に……？」

僕の町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考えても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ガサツ。

ふいに、背後で物音がした。

「な、何……!？」

身をこわばらせて、次の反応を待つ。

フー……フー。

何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。

おそろおそろ後ろを振り返る。すると、一匹の獣が僕の目に映った。

角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、僕が今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、僕の身長と同じくらいだろうか。

背に、亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様の隙間から、雑草が生えている。その姿が、なんとも滑稽で、愛らしいと言えなくもない。

しかし、今の僕に、愛らしいなんて言っている余裕はなかった。

どんな危険な生物か、わからないからな。僕とそいつとの距離は今、一メートルにも満たない。

とはいえ、見るからに愚鈍そうな獣だ。刺激しないよう、静かに後ずさる。そうして、そつと立ち上がった時……。

ザッザッ！

僕の動きの何が気に入らなかったのか、そいつは前足で勢いをつけると、いきなり僕に向けて突進しだした！

「うわあああああああ！！dfjslksadsfd」

もはや気が気じゃない。僕は意味不明な言葉をわめきながら、森の奥へと走った。だが、獣はしつかり僕の後を追いかけてくる。

突然、何かに蹴つまづいた。あわや転ぶというところで、もう一方の足でなんとか踏みとどまる。見ると、地面にロープのようなものが這わせてあるが……？

すると、今度は頭上から木の杭がふつてきた！それも何本も何本も。円を描いて落ちてくるので、僕はその円の中心に避難した。ふつてきた木の杭は、先がとがっているので、うまい具合に地面に突き刺さっていく。

ようやく、木の杭の落下がおさまった。幸い、この木の杭におびえて、獣は追跡をやめたようだ。グルル……と喉を鳴らしながら、二、三メートル離れた場所から僕の方を見ている。

ハアアアア……。

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に、果物の束のようなものがぶら下げたある。自然に生えたものではない。果物の束を網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げたようだ。

そうか、罨だっただな。よく見れば、木の杭のあいだあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると、地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から、網をはった木の杭がふつてきて、獣を取り囲む。と、まあ、そういうことだろう。それにしても、誰がこんな仕掛けを作っただろう。

「伏せろ!!」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えっ!? 伏せろって……!?

「ガアアア!!」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて、今にも僕に飛びかかるようにしている! いや、僕に飛びかかるようにしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか? どちらにしても、危険な状況であることに変わりはない。

「伏せろって言うてるだろ!」

そ、そうか。伏せるのか……。

僕があわてて頭を下げると、僕の頭のとっぺんの毛をかすめて、何かがものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまっすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ! 誰かが木の上から矢を放ったらしい。

さらに二本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながら、しばらく暴れていたが、やがて横に倒れると、動かなくなった。

おそろおそろ木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもった……少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年は僕よりも少し上のようだ。16〜17歳と

いったところだろう。黒いベストの上に、皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣、ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、僕を驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかった。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロードとでもいうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によって銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

僕が少年の方をぼうつと見ていると、彼が口を開いた。

「あーあ、罨を台無しにしやがって。生け捕りにし損ねたじゃねーか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かった。この罨は、彼が仕掛けたものだ。さっきの変な獣を捕まえるために。それが、僕のせいで失敗してしまったのだらう。

だけど、僕だって必死だったんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」

僕が話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そして、僕の前に歩み寄ると……。

??

網ごしに、僕の顔をじいっと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」

「……かわいいな」

僕は、混乱した。

か、かわいって……。確かに、クラスの女の子に「エンノイアくんって、かわいいー！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは、男には言われたくないっていうか……。

僕が一人でどきまぎしているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？ 羽？

僕に羽なんかあったか？

「ひゃっ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があった。目の前に黄色い羽根が舞った。

そうだ、黄色い羽根といえば……！

「デュークー！」

なんと、そこにいたのはデュークだった。いつの間にか、近くにいたらしい。

毎度のことながら、神出鬼没だな。こいつ……。

でも、よかった。ここがどこだかわからないけど、一人じゃないだけで、ずいぶんましだ。

「それで、ここは一体どこなの？」

僕は、目の前の少年に問いかけた。ちなみに、僕はさっき、ハマっていた罠から出してもらっていた。

「何だ、お前よそ者か？ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」

「アイオリア！？」

僕は、耳を疑った。

アイオリアって。そう、確か、あの天の声が言っていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、僕に課せられた条件。

「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を壊せ、と……。僕はその、聞いたことのない国、アイオリアに来てしまったというのか？

僕が一人考えていると、弓の少年は、ブーツにさしていたナイフを取り出し、さっき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。

「な、何をしてるの？」

突然の行動にぎよつとした僕は、聞いてみた。

「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら、家畜として高く売れるんだが」

「へえ……」

この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。

それはともかく、僕は再び考えた。あの、天の声。アイオロスと  
か言ってたっけ。あいつが、言っていたことだ。

「アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほし  
い」……。

国王って都にいるものじゃないのかな。

「よし、決めた！」

なんだ？ という感じで少年が振り返る。

「この人に、都まで連れて行ってもらおう！」  
ドテツ。

少年がわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。

「なんだそりゃ！ 勝手に決めんな！ だいたいなんで俺がお前を  
都に連れてってやらなきゃいけないんだ！」

彼がもつともなことを言った。でも、僕は引き下がらないぞ。

「お願い！！ 僕は、どうしても都に行かなきゃならないんだ。で  
も僕は道もわからないし、さっきのやつみたいな化け物も倒せない  
し」……」

「だめだな」

少年は、あっさりと否定した。

「都に行くためならなんでもするよ、仕事も手伝うよ！？」

なおも食い下がるが、

「そういう問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし。だい  
いち」……」

少年が僕の襟首をつかんだ。

「……俺は人間ってのが大嫌いなんだ。とつとと失せる。俺がお前  
に優しくしてられるうちになー！」

ドサツ。軽く突き飛ばされた。

「じゃあな。モンスターと魔物に気をつける」

そう言っ、少年は立ち去ってしまった。一人取り残されて、デュークと顔を見合わせる。（こいつ、人間みたいな動きをするんだ）いけそうだったのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だったし。それに人間が嫌いって……じゃあなんで僕を助けてくれたんだろう？

まあ、考えても仕方ないか……。僕は、とりあえず歩き出すことにした。

ここが、最南端って言うてたな。北に歩けば森の外に出られるだろうか？ 今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西ということとは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

僕は、とりあえずそう考えることにして、この見知らぬ大地を歩き始めた……。

つづく

## 第二話 森の狩人（後書き）

よかつたら感想等、聞かせてください



### 第三話 暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなつた。

しかし、一向に森から出られる気配がない。

方向が間違つていたんだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるのかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとう僕は、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまった。

「ピピッ」

デュークが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「デューク……。お前、飛べるんだから、どうなってるのか見てきてよ」

通じるわけがないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデュークは「わかった！」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行った。

しばらくして、デュークが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピピッ！　パイ！　ピピピッ！」

「な、何？　なんて言ってるの？」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、僕にはさっぱりわからない。

僕が鳥の言葉でも話せばいいんだけど……。

「あ！　デューク……！」

しびれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、僕のことを見捨ててしまったんだろうか。  
そりゃ、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経ってないんだし。さほど、なついてるってわけでもなかった……かもしれない。

だけど、デュークまでいなくなってしまうと、僕は本当に独りぼっちだ。

真っ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のようなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言ってたっけ。「モンスターと魔物に気をつけろ」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……って何だろう。

たくさん恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

(そんなもの、いるわけない!!)

僕はあわてて頭からそれらのイメージを振り払うと、暗闇から、  
明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であったことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちゃんと、話し合えばよかった。母さんと、ロバートと。

僕……、何やってるんだろう。

何だか、悲しくなってきた。すごく……みじめな気分だ。

僕が落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。

デュークだ！　きっとデュークが戻ってきてくれたんだ！

僕のことを見捨てたわけじゃなかったんだ！

「デューク！」

嬉しくなつて、振り返る。

しかし、僕の目に入ったのは、デュークではなかった。

背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い二つの光のセットが、森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいつそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひっ……！」

僕は恐ろしくなつて、その場を立ち去ろうと、駆け出した。

と、その時……！

「うわあー！」

黒い塊が、僕に向かって大量に飛んできた。羽音の正体は、無数のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、僕にまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こう集団でこられると、たまつたもんじゃない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをはがそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、まとわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。

絶え間ない攻撃と、息苦しさ、意識がもろろつとしてきた……。

僕、死んじゃうのかな。

こんな、わけのわからない場所で？　母さんと仲直りもできない  
まま？

そんなの、嫌だッ……！！

必死に叫んだが、声にならなかった。

ヒュッ。

突然、二、三個の石ころが飛んできた。すると、コウモリたちが  
一斉に僕から離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行ったようだ。

一体、どうなってるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになってしまった体を起こすと……  
…。

「まったく。見てらんないな。プテラスごときに死にそんな顔しや  
がって」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会った少年だっ  
た。しかもその肩には、デュークがのっている！

「プテラスは動くものを追う性質があるからな。出会ったら、あんな  
まり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さっきのコウモリのことを「プテラス」と言っている  
のだとわかった。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？　それに、デュークも……」

少年は、こともなげに答える。

「さっき、こいつと会ったんだよ。聞けば、お前が道に迷ってるっ  
て言うからさ」

僕は啞然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるの  
だろう？

僕には、デュークが何を言っているのか、サッパリだったのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、僕の肩に飛び移った。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、僕はあることに気がついた。

「じゃあ、僕が道に迷ってるって聞いて、わざわざ助けに来たの？人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかったらしい。彼の顔がみるみる赤くなってきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事があつて……」

嘘だな。

顔を真っ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。その様子が無性におかしくて、僕は吹き出してしまった。

「な、なんだよ！ 何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒィー、涙を流しながら、笑い転げる。

緊張の糸が解けて、僕は……笑いが止まらなかった。

夜の暗闇の中に……僕の笑い声が、ひときわ大きく響いた。

つづく

### 第三話 暗闇の中で（後書き）

よかったら感想等、聞かせてください

#### 第四話 闇からの襲来 part 1

目の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。

小さく刻まれたキノコが浮いただけの、実に質素なものだが、それでも今の僕にはご馳走に違いなかった。

目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。

僕は、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアーのことを思い出していた。

もつとも、あの時のキャンプファイアーはもつとずつとにぎやかだったけれど。

今は、肩の上でうつらうつらしているデュークを除けば、隣に少年がひとり座っているだけだ。

まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のように美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。

少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ユークリッド。職業は、ハンターといったところかな。

各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしているらしい。

まだ高校生くらいの年齢だというのに、なぜそんな暮らしをしているのか。気になったが、そこまでは聞くことができなかった。

（もしかしたらこの国では普通のことなのかもしれないけど……）

え？ なぜ僕が彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかって？

話は、僕がコウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらったところまでさかのぼるんだけど。

助けてもらった後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、僕は笑いが止まらなかった。

『何がおかしいんだよ!』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ!』とか、何やらわめいていたシーアだったが、突然、笑っている僕に、網でできたカゴをかぶせてきた。

「わっ! いきなり何するんだよ!」

「薪集めてこい!」

「はあ? 薪?

全くわけがわからない。すると、シーアが言った。

「仕事、手伝うって言っただろ?」

確かに言っただけど……。それは、都に連れていってもらった交換条件として言っただんだ。

あ、あれ? てことは……。

見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。

「一緒に行つていいの!」

「まあ、この際しょうがないだろ」

何がしょうがないのかよくわからないが、とにかく連れていってもらえることになったようだ!

「さっさと薪集めてこいよ!」

そんなわけで、僕は彼と都に行くことになったのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作ってくれたのだ。

シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、僕が集めてきた薪を使つて、焚き火を起し、あっという間にスープを作ってしまった。

これが、すごくおいしいんだ。きつと、いつも森で生活してるか



ら、こういうことに慣れてるんだろうな。

彼はさっきから、こっちの方を見向きもせずにスープを飲んでいくけど。

「ピピッ」

僕の肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行った。

「お、お前も食うか？」

シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。

満面の笑みを浮かべて、すごく楽しそうな様子だ。

彼が笑うのを、僕は初めて見た気がする。

そういえば、デュークのことを「かわいい」って言ってたな。

「動物が好きなんだね！」

僕が言つと、シーアは僕がその場にいることを忘れていたかのよう

うに驚いた。

「ま、まあな」

ちよつと気まずそうにした後、

「動物は裏切らないから……」

聞こえるか、聞こえないくらいの声で、つぶやいた。

動物は裏切らない？

なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「さて、明日も歩くし、そろそろ寝るか」

シーアは、先ほどの荷物から、薄い布を二枚取り出すと、それを地べたに布団のように敷いた。促されるまま、その中に潜り込む。

「あれ、シーアは寝ないの？」

てつきり、もう一組布を出すのかと思ったら、シーアは木にもたれて座ったままだ。

「ん？ ああ。俺は火の見張りだから」

そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちやいけないんだ。

っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろっか!? 僕も交代で見張った方がいいんじゃないか?

「当たり前だ。二時間したら起こすからな。さっさと寝ろ」  
なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、僕はなかなか眠ることができなかった。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎって、落ち着かなかったからだ。

母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかったことになる。きつと、心配しているだろうな……。

そうだ、今日は見たい番組があっただけ。母さん録画してくれているかな。

明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないかな?

眠れないな……。

ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかったまま、顔を伏せていた。

僕が声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。

どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。

「シーア、ブネウマの鏡……って知ってる?」

意外にも、すぐに返答がきた。

「ああ、聞いたことあるな。確か魔界と通じてるって……」

「ま、魔界!? 魔界なんてものが本当にあるの!」

僕は、驚いた。思わず布団からはね起きる。

モンスターに、魔物に、魔界だって？ 非現実的にもほどがある。  
「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」

「その、モンスターとか、魔物とかって何なの？」

さつきから気になっていたことを聞いてみた。

「そんなことも知らねーのか？」

だってしょうがないじゃん。僕の国にはそんなものないんだから。

シーアは、ため息混じりに、説明を始めた。

「いいか。モンスターっていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化<sup>へんげ</sup>したものだ。俺がさつき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」

へえ……。でもアイツ、元は何の動物だったんだ？ あんな動物見たことないぞ。

「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリプスって呼ばれてる」

そういえば、甲羅のような背中に雑草が生えてたっけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。

「対して、魔物ってえのは、魔界から来る、と言われてる生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

なんだか、ものすごい話になってきたな……。

森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るといふ魔物たち。そして、その魔界と繋がっているという、プネウマの鏡……。この国は、僕の住んでいる世界とは随分と異なるようだ。

眠れるわけないと思っていたが、さすがに精神的な疲れもあつてか、シーアが話を終える頃には眠りに落ちていた。

もつとも、二時間後にはきっちり叩き起こされたけど。

見張りを交代し、二時間後ほど経ったところで、再びシーアを起

こし、眠りについた。

「私たち二人きりで暮らすことにしたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ」

母さんが、ロバートとどこかへ行ってしまう。

嫌だ！ 僕を置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！ 行かないで！」

やった！ つかまえた……！

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかった。

寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシアだった。僕は間違っ、シアの上着をつかんでいたらしい。なーんだ。夢か。てっきり母さんが、僕をおいてロバートとどこかへ行っちゃうのかと思った。

「それで、あとのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、僕たちは早々に出発した。

「そうだな。あと三日ってとこかな……」

「三日あ！？ もうちよつと早く行けないの？」

三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると搜索願いなんか出されちゃうかもしれない！

「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから」

馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

ガサツ。

だしぬけに、森の中から物音がした。僕とシースに、明らかな緊張が走る。

ガサツガサツガサツガサツ。

ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移っている気配がする。

トリプスではなさそうだ。もつと身軽なやつだ。

一瞬昨晚のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあのような大群ではないだろう。

「シース……」

「しっ。黙ってる」

見れば、シースはとつくに弓を構えている。

ガサツ！

ソイツが僕らの横を通りすぎた時、シースが矢を放った。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴って落ちてきた。

シースと共に、その物体に駆け寄る。

よく見ると、それは小さなドラゴンだった。

いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだった。

ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持っているが、手はないようだった。

「コイツは魔物だな……」

そのドラゴン？ を見て、シースが呟く。

そうか、魔物……。

魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。

それにしてもおかしい。確かシースは魔物は夜にしか出ないと言

つていたはずだけど……。

「そうなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることがある。これは何か、この国でおかしなことが起こっているのかもしれない……」

僕らはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。

辺りが夕闇に包まれた頃、僕らの目の前に一つの村が現れた。

「村だ！」

僕は歓喜した。疲れ果てて、もう一歩も動けそうになかったからだ。

今日は晴れていたというのに、僕もシ어도雨に降られたように汗でびっしょりだ。

相変わらず元気なのは、鳥のデュークくらい。ちえ、飛べるやつはいいよな。

ともかくこれでゆっくり休める……。

「さて、ここら辺でひと休みするか！」

そう言いながらシアが荷物を置いた『ここら辺』とは、まだ村に入りきらない森の地面の上だった。

そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。

「む、村に入らないの!？」

僕が慌てて聞くと、シアはさも当たり前のように答えた。

「言つたろ。俺は人間が嫌いだって」

「で、でも……!」

足が棒になったように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだななんて。

「それに、宿に泊まる金なんかねーし」

た、確かに……。

僕は家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもらえるよう交渉することもできなかったかもしれないが、もう僕にそんなことをする体力は残っていないかつ

た。

「じゃあ、僕も野宿する……」

僕は、心底がっかりしながら、了解した。

シーアはそんな僕の様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

つづく

## 第五話 闇からの襲来 part 2

「……イア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まただ。

うつすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとき……。

「エンノイア！」

僕は飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！ 今は僕が火の見張りをしていたんだっ！ 寝ている場合じゃない！

よかった……。火は消えてない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。

やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日は僕が先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。

数分と経たないうちに僕は眠りこけてしまっていたのだ。



この国には、『モンスター』と呼ばれる、動植物が変化<sup>へんげ</sup>し、凶暴化した生き物たちと、『魔物』と呼ばれる、魔界から来る生き物たちがいる。

森の中だから、普通の野生の動物なんかもいるだろう。

そういった者たちに襲われないようにするため、火を焚き、夜通し見張りをしなければならないのだ。

僕は、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター

『プテラス』というらしい　のことを思い出して、身震いした。もう二度とあんなのには関わりたくない。しっかり見張らなきゃな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシーアを見た。

焚き火に照らされる、シルバードロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。

こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。

二時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。

……しかし彼は、僕と見張りを交代した後も、ときどき起きては僕の様子をうかがっていたのだ。

最初は、眠れないのかな、とか、僕が居眠りをしないか心配なのかな、とか、思った。

でも、次第に、僕を警戒してるっていうのかな……、僕があやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかった。まるで、人間におびえる獣のように。

寝る時も決して短剣を手放さない。

普段は、ちよつぱり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。

けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。

そういったことが、シアがこれまでたどってきた人生を物語っているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はぐっすり眠っているように見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？　ちよつと待て。

じゃあ誰が僕の名前を呼んで、僕を起こしたんだ？

「ピピッ！」

僕が考えていると、どこにいたのか、デュークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デュークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、僕が森で道に迷っていた時。

なんとデュークは、一度は離れたシアを、呼びに行ってくれたのだ。

どういうわけか、シアにはデュークの言いたいことがわかるように、僕が道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

僕には、デュークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデュークがあわてている理由がわかったからだ。「げえッ!？」

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても目を開けていられない。

あんなに頑張っで見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！ とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴンに似ていた。

もちろん、大きさは全然違う。

片方の翼だけでも、僕の身長くらいはありそうだ。

「シーア！ 起きて！」

あわててシーアをたたき起こす。

しかし起こすまでもなくシーアはとくに起きていた。

あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。

「魔物だ！ ワイバーンだ！」

シーアが叫ぶ。

そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、僕たちの頭上を飛び去って行った。

飛び去った後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていった。

「逃げるぞ！」

呆然と突っ立っていた僕の腕をつかみ、シーアが急かす。

僕たちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走った。村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。

そう、ドラゴンが飛び去ったのは、村の方向なのだ！

そして、僕は信じられない光景を目の当たりにした。

村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。

先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで熱気が伝わってきた。

熱気にあおられて、森のざわめきが激しくなる。

一瞬にして、村は炎に包まれた。

人の気配すらほとんどしなかった静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。

燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女、親とはぐれたのであろう子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなった老人……。

懸命に家を消火しようとする者もいたが、とても意味のあることとは思えなかった。

村が、文字通り地獄のように変わってしまったのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。

「あ！ シーア！ 女の子が！」

村の中央広場に降り立ったドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回っていた少女の肩をその鋭い爪でつかむと、少女をつかんだまま再び上昇し始めてしまった！

「さらうつもりなんだ。大変！ 助けなきゃ！」

僕はシーアの方を振り返り、そう言ったが、

「いや……助けても無駄だ、行こう」

なんとシーアはそう言うのと、村とは反対方向に歩き出そうとしていた。

「無駄……だつて？」

僕は耳を疑った。

見捨てろつていうのか！？

目の前で村が襲われているのに！？ 女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思つてた。

素直じゃなくても。人間嫌いでも。

なんだかんだで僕を助けてくれた。  
それなのに……。

「そんなの納得できない!!」

僕は思わず叫んでいた。

シーアが驚いて僕の方を見る。

「弓を貸して！ 僕が助ける！」

僕はシーアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かって構えた。

弓の弦が思った以上にかたい。歯を食いしばりながら引くのがやっただ。

「お、お前、弓が使えるのか!？」

シーアが背後で叫ぶ。

「やったことないけど……」

弓を一層強く引く。弦が指に食い込んで痛い。

「やるしか……ないだろ……!!!!!!」

叫ぶと同時に、僕は矢を放った。

つづく



## 第六話 闇からの襲来 part 3

ヒュンッ!!

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った……………

……ドラゴンとは全然違う方向に。

当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、少女をつかんだまままだ。

「あれ？」

「お前……下手だな」

シアがあきれた声で言った。

「貸せ。弓っていうのはこうやって射るんだ」

シアは、僕から弓をむしり取ると、その繊細な外見からは想像できないほど、軽々と弓を引いた。

そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。

ギャオオオウ!!

ドラゴンは悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて少女を解放した。

「あ！ 落ちるよ！」

少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に落下してしまったのだ。

「下は森だから大丈夫だろ。それより……来るぞ！」

シアが言うよりも早く、怒りに狂ったドラゴンが、こちらに向かって突進してきた！

ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。

ドラゴンの鋭い爪が、目の前に迫ってきた。

身がすくんで、動くことができない。目を固く閉じ、身をかがめ、ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。

一瞬、何かが覆いかぶさってくるような感触がした。

ビュウウウウウ。

ようやく、風がおさまり、おそろおそろ目を開ける。

……………？

特に、何事もなかったようだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。

だが、シーアはそうではなかった。

苦しそくに息をつきながら、しゃがんでいる。

「くっ……………」

「シーア！」

なんと、シーアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ搔かれていたのだ！

大怪我というほどではないが、服が裂け、血が出ている。

破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。

肩に触れようとすると、うるさそうに払いのけられた。

「いいからお前はあの女を助けに行け！」

「シーアはどうするの！？」

まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……………！！」

ハア、ハア、ハア。

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。

村からは少し離れたところに落ちたようだ。

ドラゴンは、再び村の広場のあたりを旋回していた。

下の方から、数本の矢が飛んでくる。

その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはうまくかわされた。

（シーアが戦ってるんだな）

村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。



と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。

あの女の子が履いていたものだ！

急いで草をかき分ける。

すると、落ち葉にまぎれて、一人の少女が倒れていた。

思った通り、さっきドラゴンにつかまっていた少女だ。

歳は、僕と同じくらいだろうか？ 金色の長い髪に、カチューシヤをしている。

気を失ってはいるが、幸い、目立った怪我はないようだ。

どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。

「あ……あなたが助けてくださったんですか？」

ありやりや。まいったな。

そうとも言えるし、そうでないとも……。

とりあえず、僕はちやつかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、僕はあることについて考えていた。さっき、ドラゴンに襲われた時。

一瞬何かが覆いかぶさってきたような気がした。

あれは、シーアが僕をかばってくれたのだ……。

だから、僕は怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ搔かれてしまった。人間嫌いと言いながら、僕をかばってくれる。少女を見捨てると言いながら、今こうして村のために戦っている。

僕にはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シーアは相変わらずドラゴンに矢を放っていた。

しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。

何本矢が刺さろうが、全く動じていない。

ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。  
炎を吐く気だ！

「あーんママー！」  
間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てしまった。

ドラゴンがそちらを振り向く。

「危ね……！」

シーアがとつさに子供をかばった。

ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！

「うわああああー！」

「シーアー!!」

背中に炎をくらってしまった。

がつくりとうなだれるシーア。

「村に他に戦える人はいないの!？」

さつき助けた少女に尋ねる。

「若い男は皆出稼ぎに行っているんです……村に残っているのは女  
子供と老人ばかりで」

本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。

そんな……。じゃあどうしたら……。

突然、僕の脇からデュークが飛び出した。

そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かって行く。

そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。

「デューク！ 何をする気だ！」

案の定デュークはあっさりとドラゴンの翼に払いのけられてしまった。  
った。

しかし、それでもめげずにまわりつき続ける。

とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かって軽く  
火を吐いた。

軽くといっても、デュークにとっては全身が包まれるほどの炎だ。真っ黒になったデュークが、広場に墜落してきた。

僕はあわててデュークを助けに行った。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。

嫌だ嫌だ！ デュークが死んじやうなんて！

泣きそうになるのをこらえながら、そっとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。

僕の顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。

それを見て、なおさら涙が出そうになる。

「デューク！ どうしてあんな危ないことをしたんだよ！」

デュークを叱ろうとして、僕はドキリとした。

デュークの目は、真っ直ぐ僕を見ていた。

まるで、何かを訴えかけるように。

まるで、僕を試すように。

僕には、デュークの言葉はわからないけど。

その目線の意味は、わかる気がした。

「デューク、お前……、まさか僕に戦えって……？」

返事するように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そうだ、戦わなくちゃ！ 助けなきゃ！

村の人たちを。そして、シアを。

だけど、どうしたらいい？

僕には、力も、武器もない。

何か良い方法はないだろうか？

あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。

そうか、これなら……。

アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙って吐いている。魔物は知能が高いのだと、シアは言っていた。

僕は閃いた。

本当に、一か八かの方法だけど。  
或いは、うまくいくかもしれない。

シーアは、新たな矢を取ろうとして、もう矢が残っていないことに気がついた。

ドラゴンが、勝ち誇ったように、シーアに向けて炎を吐く準備をしている。

不意のことに、シーアは避けることができず、立ち尽くしていた。

僕は大きく息を吐き、シーアを突飛ばし、かばった。

ゴオオオオ。

もろにくらうことは避けられたが、熱気が背中当たる。

背中が焼けそうなほど熱くなった。

「エ、エンノイア!？」

シーアが目を見開いて驚いている。

僕は、シーアをかばうようにして立つと、ドラゴンに向かって声高に叫んだ。

「やいワイバーン! 村を焼くなんてずるいぞ! 僕と正々堂々勝負しろ! 負けたら大人しく帰るんだぞ!」

シーア含めて、周りの人たちは皆「何を言ってるんだコイツは...」と言わんばかりにぼかんとってしまった。

ドラゴンにこんなこと言ってもしょうがないと思う。

でもセリフはどうでもいいんだ。

ヤツの気が引ければ。

僕は方向転換して、ドラゴンを挑発するように走った。

狙い通り、ヤツは僕の後をついてくる。

身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの高さになった。

そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。  
今だ！

僕は、さっき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やった！

突然のことにドラゴンは目を白黒させながら動揺している。

必死に足をバタつかせるが、丸太はドラゴンの口にピッタリとはまっているので、なかなか取れない。

さあ、これでとどめをさせば……！

ここで、僕は、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。

僕にはドラゴンにとどめをさす手段がないのだ。

その時、ふいに肩を叩かれ、声が聞こえた。

「よし！ 後は任せろ！」

シニアだ！

シニアは腰のベルトから短剣を取り出すと、未だ暴れているドラゴンの腹に突き立てた。

ギャオオオオオオオオ！！

耳をつんざくような悲鳴が、村中に響き渡る。

シニアが勢いよく剣を引き抜くと、ドラゴンの腹からどす黒い血があふれ出てきた。

さらにもう一撃加えようと、剣を構える。

と、その時。ふいにドラゴンが翼をはためかせた。

「うわ！」

翼に弾き飛ばされるシニア。

ドラゴンはそのまま浮上すると、一気に飛び去ってしまった。  
しばらく警戒して注意深く見つめていたが、どうやら村に戻ってくる様子はなさそうだ。

「ちっ、長い剣ならとどめがさせたのに……」

シアがひとりごちた。

「シア！」

僕はシアに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」

ポカッ。

あれれ、てっきり褒められると思っていたのに。いきなりこづかれてしまった！

「なんて無茶なことをするんだ！ 失敗したらどうするつもりだったんだ！？」

再び手を振り上げた。またたたかれると思い、とっさに目をつぶると……。

「……だけど。お前見かけによらず勇気あるんだな。感心したぜ」

シアはそう言って、僕の頭にふわりと手を置いた。

そっと目を開けると、シアは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。

この国に来てよかった。シアに会えてよかった……。

大げさだけど、僕は、そんな気持ちになっていた。

僕は笑って、シアとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。

避難していた村人たちのようだ。

あの少女が言っていた通り、村人のなかには、老人と女子供しか見当たらなかった。

その中の、リーダー格と思しき初老の男が前に進み出た。

実のところを言うと、僕はちよつと不謹慎な期待を抱いていた。はつきり言って、僕たちはヒーローだ。この村を救ったんだから。

だからきつと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰ったりしてそんな勝手な想像をしていた。

しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。

「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」

「見る。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」

そ、それはそうだけど……。

村が焼かれたのは僕たちの責任じゃない。

すると、その男は僕の隣にいたさっきの少女を見た。

「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰ってくれたかもしれんのに

……」

「そんなぁ……！」

助けを請うように、シーアの方を見る。

しかし、シーアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、

「だから言っただろ？ 助けても無駄だって」

そう言って、村の外へと歩き出してしまった。

僕も、村人たちに追われるように、村を出た。

あの少女が、物言いたげに、村を去る僕たちを見つめていた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9070v/>

---

aiolos

2011年10月9日03時27分発行